

第 61 回学術大会パネル発表報告

仏教用語の現代語訳と定義的用例集 (バウツダコーシャ) の構築に向けて

代表 斎藤 明

1. 問題提起

二千四百年を超える歴史を刻んできた仏教にとって、多くの術語の意味をそれぞれの文脈において再検証し、そのうえで学界の衆知を結集して、これらの術語を現代語として蘇生させるという試みはきわめて重要な意味をもつ。仏教思想をより身近で開かれたものにするのが期待される今日、仏教術語に関する定義的ともいえる主要な用例を根拠として提示しつつ、現代語（日本語・英語）への基準的な訳語集を策定することの意義は大きい。

本パネルは、このような現代的な課題に挑戦することの意義を認識する 5 人のパネリストが、それぞれの研究成果を踏まえた上で、初期仏教、有部アビダルマ、唯識、中観、仏教論理学における代表的な術語を例として取りあげ検証した。いずれの発表も科学研究費補助金・基盤研究（A）「仏教用語の『日英基準訳語集』構築に向けての総合的研究」（平成 19-22 年度）による研究成果の一部であるが、それぞれの発表につき忌憚のない質疑応答と意見交換を行った。

2. 各発表要旨

2.1. 高橋晃一（東京大学特任研究員）「五位七十五法の現代語訳と定義的用例に関して」

高橋氏は、当該研究が採用した XML 形式の特徴と利点をまず説明した。XML とは Extensible Markup Language（拡張可能型情報記述言語）の略称で、約 10 年前に登場した比較的新しいコンピュータ言語だが、柔軟な構造と汎用性にすぐれ、今日では情報処理の分野で広く利用されている。多様な言語を扱う必要があり、また諸種のデータベースや Web 上の辞書類との連携も求められるインド学仏教学の分野では、大きな効力を発揮することが期待される。その上で氏は、有部アビダルマの五位七十五法に関する入力データの複数例をサンプルとして斎藤研究班による成果の一端をスクリーン画像を通して解説した。

2.2. 畑 昌利（種智院大学非常勤講師）「初期仏教関連の用語をめぐって」

畑氏は *avyākata* および *amarāvikkhepa* の両語を例として取りあげ、初期經典における用例とその注釈文献が与える解釈を基礎として現代語訳を試みることの意義とともに、特有の難しさを詳説した。*avyākata* については、4 種類 10 項目等からなるいわゆる形而上学的な質問に対するブツダの不回答（無記）を示す用例のほか、善・悪に関して区別されないという趣旨からの「不確定の」という意味で

の用例，ならびに未来の予言（授記）に関して「予言されていない」という意味での用例を区別する必要のあることを指摘した。

2.3. 斎藤 明（東京大学教授）「プラパンチャ（戯論）とは何か—ナーガールジュナの解釈を中心として—」

斎藤は、『中論』における *prapañca* の（動詞形を含む）全用例とともに，その代表的な 2 例（XVIII.5,9）に関する諸注釈者の解釈を示し，ナーガールジュナが意図する同語の意味内容を考察した。『中論』の用例をふまえ，注釈者の解釈を参照するかぎり，プラパンチャとは，「有」「無」や「常」「無常」，あるいは「生」「老死」等の対概念によっては本来捉えられない真実（=空）や縁起を，それらの対概念に執着して捉える心的なはたらきであり，煩惱の根元に位置する。「空」を説くことの目的は，このプラパンチャを静め，それによって煩惱，さらには煩惱を原因とする苦悩からの解放（=解脱）を目ざすことにある。このような意味で，ナーガールジュナにとってプラパンチャ（概念的細分化・多様化）とは，概念によって対象を細分化する誤った心的なはたらきを指すとともに，そのように誤って細分化された対象の様々な特徴を表す言葉や概念そのものをも意味するといえる。

2.4. 室寺義仁（高野山大学教授）「大乘経を典拠とする「唯心」と「唯識」の用例提示に向けての試案」

室寺氏は *cittamātra*（唯心，心のみ）および *vijñaptimātra*（唯識，表象のみ）の両語を例として取りあげ，それらの初出あるいは典拠となる大乘経典と，それを典拠として引用する論書を挙げながら詳論した。前者の「唯心」説については『般舟三昧経』が初出と考えられ，『十地経』の経句が『唯識二十論』の冒頭において唯心説の典拠として引用される。一方また「唯識」説の初出は『解深密経』であり，これを『瑜伽師地論』（撰決択分中菩薩地）や『撰大乘論』が典拠として引用するという関係にあることを詳説した。

2.5. 久間泰賢（三重大大学教授）「仏教論理学関連用語の現代語訳をめぐる」

久間氏は，仏教論理学関連で採録予定の術語一覧を提示したうえで，*pramāṇa*（正しい認識（手段））を例に，種々の問題を詳論した。伝統的な「量」の訳語，「認識」「知識」「（真）知」等の複数の現代語訳例，-ana 接尾辞が行為・状態のみならず手段をも表すこと，「正しい」という形容辞のもつ意味とその問題点，さらにまた主要な用例をいかなる範囲の文献から引用することが相応しいか等々の問題を詳説した。

3. 質疑応答

今年度大会のパネルでは 2 時間半に時間が延長されたこともあって，質疑応答と議論も一手厳しい質問や指摘も含め—かなり密度が濃かった。質問は，現代語訳をめぐる諸問題に関するものが多かったが，本研究の意義と方法に関する忌憚のない質問や建設的な意見も寄せられ，主催者としてはかなり収穫の多いパネルであった。